

農 薬 名	成 分 名	FRAC コード	適 用 病 害 虫 名										注 意 事 項		
			根 頭 が ん し ゆ 病	べ と 病	う ど ん こ 病	黒 星 病	灰 色 び 病	茎 腐 病	立 枯 病						
ヨネポン水和剤	ノニルフェノールスルホン酸銅	M01			◎										
〈 く く ん 煙 剤 〉															
硫黄粒剤	硫黄	M02			◎										
トリフミンジェット	トリフルジール	3			◎										
モレスタン水和剤	キノキサリン系	M10			◎										薬害を生じる恐れがあるので開花期に使用しない

注1) ストビリン系薬剤およびTPN剤とその混合剤との混用および近接散布を避ける。ストビリン系薬剤を含む農薬を散布した後に本剤を使用する際は2週間以上間隔をあける。アセチリド剤、トリフルジール剤、ベニル剤、キャブ剤と混用しない。

農 薬 名	成 分 名	I R A C コード	適 用 病 害 虫 名												注 意 事 項
			ア ブ ラ ム シ 類	カ イ ガ ラ ム シ 類	ハ ダ ニ 類	チ ユ ウ レ ン ジ ハ バ チ	ア ザ ミ ウ マ 類	ミ カ ン キ イ ロ ア ザ ミ ウ マ	コ ナ ジ ラ ミ コ ガ	オ オ タ バ コ ガ					
〈 く ん 煙 剤 〉															
マブリックジェット	フルパリネト	3A	◎		◎										
モスピランジェット	アセタミプリト	4A	花												花：【花き類・観葉植物登録】

注1) ストロビリン系薬剤およびTPN剤とその混合剤との混用および近接散布を避ける。ストロビリン系薬剤を含む農薬を散布した後に本剤を使用する際は2週間以上間隔をあける。アセタミプリト剤、トリフルメサル剤、ペニシル剤、キャブタ剤と混用しない。

ウ 病害虫防除法（バラ）

（ア）うどんこ病 *Erysiphe simulans var. simulans, Podosphaera pannosa*

（防除のねらい）

病原菌は病斑部や芽の周辺で越冬する。20℃位の多湿条件で発生しやすい。多発してからの防除は困難なので予防散布が重要である。

（耕種的防除法）

- （1）多湿を避ける。
- （2）罹病落葉は集めて焼却する。
- （3）窒素過多，カリ欠乏を避ける。

（イ）黒星病 *Diplocarpon rosae*

（防除のねらい）

病原菌は枝や落葉の病斑部で越冬し，伝染源となる。露地栽培では5～6月と秋季に多くなる。施設栽培では極めて少ない。多発病枝の除去や休眠期防除を徹底する。

（耕種的防除法）

- （1）落葉を整理し，病枝は除去・焼却する。
- （2）密植を避け，通風をよくする。

（ウ）根頭がんしゅ病 *Agrobacterium tumefaciens*

（防除のねらい）

土壌伝染性細菌で連作地に発病が多い。傷口から侵入し，発病するまで5～20日位かかるが，長い場合は3か月くらいのときもある。発病してからの防除は難しいので，病原菌をもちこまないようにする。苗木導入にあたっては特に留意する。

（耕種的防除法）

- （1）健全土壌に健全苗を植付ける。
- （2）被害株は土壌とともに除去する。
- （3）発病ほ場では連作しない。

（エ）灰色かび病 *Botrytis cinerea*

（防除のねらい）

多犯性病害で多湿条件で多発しやすい。施設栽培では暖房と換気によって施設内湿度を下げるのが大切である。

（耕種的防除法）

- （1）ハウスでは換気を図る。
- （2）罹病花葉は除去する。

（オ）べと病 *Peronospora sparsa*

（防除のねらい）

昼夜間の温度格差が大きく，多湿条件で発生しやすい。施設栽培では春と秋に発生が多く，特に窒素過多は多発生しやすい。

（耕種的防除法）

- （1）発病枝，葉は直ちに除去・焼却する。
- （2）多湿を避ける。窒素過多は避ける。
- （3）昼夜間の温度格差を少なくする。

（カ）ミカンキイロアザミウマ

（防除のねらい）

平成7年に発生が確認された侵入害虫で，開花直前の蕾内に侵入し，花弁を食害する。高密度になると防除が困難になるので，発生初期に防除する。

(キ) タバココナジラミ

(防除のねらい)

寄主範囲が広く、野菜・花き類、雑草に寄生する。葉裏に寄生し、吸汁加害するが、多発するとすす病を併発し、葉が汚れる。繁殖が旺盛で短期間に高密度になるので、発生初期の防除に重点を置く。同属のオンシツコナジラミに比べて薬剤に対し感受性が低い。

(耕種的防除法)

- (1) ほ場周辺の寄主植物は防除する。
- (2) 苗や鉢物の移動により、まん延することが多いので注意する。

(ク) アブラムシ類

(防除のねらい)

イバラヒゲナガアブラムシ、バラミドリアブラムシ、モモアカアブラムシなどが寄生し、若芽及び蕾などの生育を阻害する。春と秋に発生が多いが、ハウス栽培では冬でも発生するので早めに防除する。同一薬剤の連用はしない。

(ケ) カイガラムシ類

(防除のねらい)

数種のカイガラムシが寄生するが、バラシロカイガラムシが主である。一般に成虫は6～7月上旬、9～10月に現れるが、ハウスでは不規則である。幼虫の発生期に薬剤散布する。

(耕種的防除法)

幼虫、成虫をこすり落とす。

(コ) ハマキムシ類

(防除のねらい)

チャハマキ、チャノコカクモンハマキが発生するが、チャハマキが主である。晩春から夏にかけて発生が多い。幼虫は移動しやすいので、発生初期の防除を徹底する。

(サ) コガネムシ類

(防除のねらい)

マメコガネ、ドウガネブイブイの発生が多い。成虫は葉、蕾、花卉等を、幼虫は根を加害する。

(耕種的防除法)

- (1) 成虫は活動が鈍い早朝に捕殺する。
- (2) 野積み堆肥は幼虫が生息しているので持ち込まない。

(シ) チュウレンジハバチ

(防除のねらい)

年2～3回の発生で4～5月に第1回の成虫が組織中に産卵する。ふ化直後の幼虫は群生し、のち分散する。分散前に防除するのがよい。

(ス) ハダニ類

(防除のねらい)

密度が高くなると、防除が困難になるので早期発見に努め、低密度のときに薬剤散布を行う。抵抗性回避のため同一薬剤を連用しない。